竹本駒之助 女流義太夫一代記

その6

越路師匠の教え、春駒との縁の段

【チラシ使用写真】
竹本駒之助二四歳　新婚当初　湯島の自宅にて

嫁ぎ先の母・三生（鶴澤三生）と芸の母・春駒（竹本春駒）を相次いで看取ったのは、私が五〇歳くらいのときです。お酒が大好きだった三生は、お医者様のお許しを得て最後まで吸い飲みでお酒を楽しみ、昭和五九（一九八四）年に亡くなりました。その約三年後、春駒は「ありがとう」と言って九七歳で旅立ちました。

春駒と一緒に三生の家にお嫁入りしたときから、決して仲が良いとは言えない二人の母の間で、多少の気苦労があったのは確かです。春駒は、三生より一回り年上で、しかも師匠格ですから仕方ないのですが、もうちょっと遠慮してくれればいいのに、と思っていました。三生も「やだよぉ、あの人は！」とよく言っていましたね。ただ、苦労といえばそれだけ。三生は、お酒を飲むと人が変わったようになりましたが、普段は本当にいい母でした。

家事が充分にできないこともたくさんありましたが、主人から文句を言われたことはありません。小さい頃から母親の仕事を見ていたからでしょう。私もずっとこの世界にいてお稽古をしていましたから、なんとかうまくいったのだと思います。

主人は普段、義太夫のことについては話しません。けれど、三生に稽古をつけてくださっていた文楽の御師匠さん方のことはよく話をしていましたね。主人が子どもの頃、三生の留守中に三味線の御師匠さんが家にいらっしゃいました。『関取千両幟』の櫓太鼓の稽古をして、「かっちゃん（主人のこと）、外へ出て、私の音を聴いてみてくれる？ 本当に幟がパタパタしているか、カンカンカンカンと櫓太鼓が近づいてくるように聞こえるか、聴いてほしい」と言われたことがあった、という話も聞きました。

今回第六弾のチラシに使っていただいたのが、新婚の頃、湯島で撮った写真です。新婚旅行は結婚式を終えた後、その足で湯西川温泉に行きました。お嫁入りこそ春駒と一緒でしたが、さすがに新婚旅行まではついてきませんでしたよ（笑）。結婚してからは、1年ほどで息子が生まれたこともあって、協会の公演に出るくらいで、舞台はそれほど多く出ていませんでした。春駒が一緒ですから、お稽古も家でしていただいてました。

二人の母が亡くなったとき、息子は二四歳、娘は十八歳となり、子育てからも手が離れた頃です。義太夫のお稽古にたっぷり時間がとれるとなると、今度はかえって怖くなってきました。怖さは年を経るごとに増していきます。それは、厳しく指導してくださる方が段々いらっしゃらなくなるからでもあります。

越路師匠（四代竹本越路大夫）との別れは、母を看取ってから十年以上経った平成十四（二〇〇二）年、突然やってきました。

「一代記その二」でお話ししましたように、越路師匠は、若大夫師匠（十代豊竹若大夫）の御紹介で十八歳から師事しました。私が義太夫を本気で勉強したいと思うようになったきっかけを作ってくださった方です。越路師匠は女性の弟子をとらない方でしたから、私は特別だったようです。最初に「君を女とは思っていない。男と思って稽古するからそのつもりで」と言われました。結婚してからも、自分の会をさせていただく時にはその都度、稽古をしていただいていました。自分の会の演目については、「どういうものをやりたいか」と言われるので、「笑われるかもしれませんけれど…」とお断りしたうえで私から申し上げていたんです。また舞台にかけるものは、どんなに小さいお役でも越路師匠にとにかく一度聞いていただいておりました。

その時（二〇〇二年）も稽古のためにご連絡をしていたのですが、何度お電話してもつながらない。その後、京都で入院されていることがわかったのです。飛んで行った

ところ、すでにご子息や親戚の方を呼ばれているような状態でした。三回目にお見舞いにうかがったとき、「四代越路大夫の表現」（高木浩志著）という御本がちょうど出来上がったところでした。長くないことがおわかりだったのでしょう、「もうこの字を書くのは最後だからね」とおっしゃって、御本に「竹本駒之助江」と書いてくださいました。そのとき、「これからは今まで僕が言ったことをよく思い出して、自分で努力しなさい」と、おっしゃったのです。涙がこぼれました。十八歳からずっとお世話になっている私は、師匠がいらっしゃらなくなるということを考えてもみませんでしたので、それを言われたとき、「ああ、もう一緒にいてくださらないのだな」とものすごく悲しかったです。

越路師匠は武士のようにきちっとした方でした。義太夫に誇りをお持ちで、世間に媚びたり、安売りしてはならない、といつもおっしゃっていました。お稽古のときはにこりともせず、厳しいダメ出しをされる師匠も、終わるといろいろな話をしてくださいました。二人の母の介護と子育てで四苦八苦していたときも、「時間がないときこそ勉強できる」と勇気づけてくださり、「辛いだろうが”人の生き死に”も（義太夫のために）しっかり見ておけよ」とおっしゃいました。師匠ご自身、洋楽の歌手の息の使い方を勉強するなど、研究熱心でいらっしゃいました。子どもの学校のことをお話すると、「さすがお前の子や！」と目を細めて褒めてくださったりもしました。私にとって、とても大きな存在でした。

このたびKAATで昨年十月に語らせていただいた『鎌倉三代記』八ツ目切「三浦別の段」で、平成二七年度文化庁芸術祭賞大賞（音楽部門）をいただくことができました。本当にありがたいことです。

KAATからお電話を受けて大賞のお話をうかがってから、二人の師匠のことを思い返していました。一人は春駒。なんといっても、私と義太夫を結ぶ一番のご縁を作ってくださったのがこの方です。「やめたい、帰りたい」と思っていた少女時代の私を「やめさせない」ようにしたのが春駒ですから、この人がいなかったら、私は義太夫を続けていなかっただろうなと思います。春駒が勲五等をいただいたとき、「あたいには誰も喜んでくれるもんがいない」と言っていましたが、いまの私には、受賞を祝福してくださる方々が、まわりにこんなにたくさんいる。なんと幸せなことだろうと思います。

そしてもう一人は越路師匠です。平成十一年（一九九九）年に人間国宝のお話をいただいたとき、真っ先に越路師匠に連絡して「こういうお電話をいただきました」とご相談させていただきました。今回の芸術祭賞大賞も、師匠がいらしたら、もちろん一番初めにご連絡したでしょう。

今回語らせていただく『日蓮聖人御法海』三段目切「勘作住家段」は、三〇代の頃、春駒にお稽古していただいて語らせていただきました。大阪で御師匠様方がなさっていたもので、その稽古を聴かせていただいていました。二〇一三年に国立劇場の「浄瑠璃名曲選」でも語らせていただきました。

登場人物は、鵜飼いの勘作と妻・お伝、勘作の母、子どもの経一、庄屋、日蓮聖人とそのお弟子さんの日朗の七人。神経を使うのはみな同じですが、一番やりにくいのは勘作です。なにしろ亡霊ですから、普通の話し方でなく、ぼやーっと、ちょっとはずれた音程で語りますし、情景のときもなんとなく雲行きがおかしくなる雰囲気を作りださなければなりません。主役はやはりお伝でしょうか。すべて失ってしまう、本当に可哀想な女性です。皆様にしっかり心情をお伝えしたいと思います。

【写真】二〇十六年二月公演のチラシ

KAAT
KANAGAWA ARTS THEATRE